

2017年5月17日

立教大学国際学術研究交流制度  
2017年度「招へい研究員」報告書

1. 招へい概要

受入 教員	所属・職	異文化コミュニケーション学部・准教授
	氏名	石坂 浩一
受入学部・研究科・研究所		異文化コミュニケーション学部
招へい 研究員	所属・職	Professor, Department of Japanese Studies, Sungkonghoe University 協定の有無：学部                      所在国：韓国
	氏名	Heok Tae Kwon
招へい期間		2017年4月17日～2017年5月16日（30日間）
研究経費		521,260円

2. 滞在中の活動

来日日および離日日を含め、滞在中の活動を記入してください。全日程（毎日）記載する必要はありません。講演会やセミナーなどを開催した場合はタイトル、会場、参加者数等を記載してください。

活動内容記入例) ○○ついて研究討議、共同研究、講演、講義、大学院生への研究指導等

年月日	活動内容
17. 4. 17	来日
17. 4. 20	研究会「私がすすめる韓国のウェブトゥーン——私のマンガ遍歴」池袋キャンパスマキムホール10階会議室、主催：平和・コミュニティ研究機構、15名
17. 4. 27	公開講演会「日本の戦後を問い返す」池袋キャンパス10号館X204、主催：平和・コミュニティ研究機構、60名
17. 5. 4	研究会「韓国青年層の仕事と暮らし——韓国の政治状況と関連して」池袋キャンパスマキムホール10階会議室、主催：平和・コミュニティ研究機構、12名
17. 5. 10	ゲストスピーカー 立教ゼミナール発展編—韓国・朝鮮研究へのアドバンスト・アプローチ 池袋キャンパス6号館6206教室、授業登録学生5名

### 3. 研究・交流状況および成果

上記に記載した活動について、具体的な研究・交流の内容および成果を、本学の学術研究、教育活動、国際交流の進展へ与える効果を含めて、記載してください。講演会やセミナーなどの参加者層（学生、大学院生、一般、教職員等）、会場の様子なども記載してください。

今回のクオン先生の立教でのお話は、日本において排外的感情が強まり、特に韓国に対して侮蔑的態度、偏見が広がっている中で、非常に有意義なものであった。インターネット上では韓国への罵りや侮蔑が当然の言説となって広まっており、冷静な韓国、朝鮮半島認識はこれまでになく力を失っている。また、おりしも行なわれていた韓国大統領選挙の当選者を「親北」「反日」など決めつける軽薄な言辞が飛び交う中、クオン先生は冷静に韓国を認識する手がかりを伝えてくださった。

日本社会を研究対象とし、日本を熟知している研究者として、日韓間の文化による交流拡大は評価しつつも、それは政治レベルでの関係改善や、日本社会が根強く抱えている韓国、朝鮮半島への偏見克服とは別次元のものであること、そして日本社会が平和憲法の下で戦後を歩んできたことが国内的には平和な状態に見えたとしても、東北アジアの冷戦の解決や植民地支配の清算などは未完のままである事実を、あらためて指摘してくださった。

学生たちにはこうした日本の戦後の意味を考える機会を作り、今後の韓国との交流をする上で、表面的な交流にとどまらず相手をより深く知ろうとするきっかけになったと考えられる。公開講演会で高校生を含めた学生の参加者から、日本の戦後のあり方や自衛隊の存在などについて、質疑が行われたことは印象的であった。

また、教員ら研究上のレベルでは韓国研究者の問題意識を、昨年来の韓国の政治状況、それを主導した人びとの政治参加をふまえてビビッドに伝えてくださった。韓国でも日本でも、しばしば世代論で政治状況を分析する視角があるが、「世代」というのはあいまいな概念で、日本の研究者が韓国を研究する上で、よりしっかりした概念規定に基づいて取り組みを進めるべきだとの提言は、とても有益なものであった。

立教大学と韓国・聖公会大学との交流は、これまでも貴重な積み重ねの下になされてきたが、クオン先生との交流は、日本社会が冷静さを失いつつある傾向が強まる中であっても、この教訓を一層日常の研究や教育に生かしていかなければならないとの意を強くするものとなった。

また、クオン先生の研究会、講演会に、立教大学に留学中の聖公会大学の留学生たちも積極的に参加して、日本の参加者との活発な意見交換をすることができたのも、特筆すべき点であった。

